

## 現代日本における博物館の役割

— 博物館活動に時事性・ニュース性を捕えて —

The Part of Museum in Modern Japan

— Accept news and current topics

in your museum activity —

上野 八恵

Yae UENO

現在、日本の教育水準の高さは世界でも屈指の中に数えられている。確かに科学技術、数学、自然科学の一部では、かつて文化的先進国と云われていたフランス、イギリス、アメリカ、ドイツ等と比べても、5分5分か、6:4位の優劣しか見られない。しかし事、社会教育部門、特に博物館に関しては、これら諸先進国と比較すると8:2から7:3位の割合で日本の遅れが見られると云われている。とにかく日本の国立の博物館でさえ、アメリカの一州立博物館にも比肩出来ないと云われている現状である。これにはいくつかの原因があげられている例えば、1. 経済的な問題 2. 国民性(日本人・日本社会の特殊性・特種構造) 3. 教育に対する考え方の遅れ、etc、色々考えられるが、戦後日本経済の高度成長と共に日本人の生涯教育が大きく考えられだして、昭和46年には文部省が取り上げ、現在では学校教育も生涯教育の一環として考えられるようになった。更に現在日本は、地方文化の開花時代と云う事で各都道府県都市町村で多くの美術館、博物館、その相当施設が林立して地方文化や産業をリードしている。こう云った博物館活動、特に教育活動は如何に有るべきか? 諸外国とは予算、施設の面で劣っていても教育活動に於いては、日本独特の光りを放つ活発な活動とするためには如何にあるべきか? を考え、私の体験から博物館で行う教育活動、展示、特別展、移動展、講演会、講習会、その他の催物に時事性・ニュース性を捕えて取り入れるることにより、従来迄の教育活動の数倍もの活況が見られる事を知りこ

こに紹介します。

「博物館教育は、何時、何処で、誰が、如何なる方法で行うべきか、理想的には人々がそれを待ち望んでいる時、正にその時に計画し与えらるべきであろう。何時想像や感受性が刺激され或はいつ目が見、精神が真に理解するかを正確にとらえる事はなかなか困難な事である。—後略—(博物館組織—その実際的アドヴァイサーの教育編より)

この言葉を大なり小なり分析して見ると、かなり難かしい事柄ではあるが、博物館教育にたづさわっている人や教育プログラムの担当者・陳列品の解説を担当する人々が、細やかな神経の持主であり、教育に熱心であり、更に博物館が、高度の社会教育機関の一つである事を認識して、常に社会の動きや時事・ニュースに敏感な人であるならば、それ程難かしい事柄ではなく、タイミングよく社会の動きや、ニュースに合せた博物館教育に成功すれば、これ程面白くやり甲斐の有る仕事は又と無い事を発見するだろう。

こゝでは博物館が社会教育機関として高度の教育的役割を有している事から考察して見たいと思います。

私達の日常生活の中で、何か古ぼけた物を見つけたり風調に合わない事を云ったりすると直ぐに「博物館行きだ!」と云う事を云ってしまう。そのように博物館とは古ぼけた物、生きの悪くなった物、風通しの悪い物のあづけ場所の様な感を世間一般の人々に与えている。この事は単に博物館に保存されている物ばかりでなく、催さ

れる行事や講演会にしても、いつもマンネリ化していて受講者も有る程度規っているし、少しも変化が無いばかりか、社会の第一線で働いている人達や若い青少年層には殆んど魅力無い存在となっている。更にいつの間にか博物館に勤務している職員まで、博物館ボケがして来て世間とうとくなる。／と云うのが現在迄の国・公・市・私立を問わず日本の博物館の現状ではないだろうか？これは私の過言ではないと思う。この様な博物館の活動や企画、教育を息の通うものとなし、若い青年層や学生、又一般社会の第一線で活躍してられる人々にもまた婦人層にも魅力あるものとし多くの人々を博物館に誘致するためには如何にあるべきか？を考え、私が博物館に在職中に実施して、あまりにも大きな反響を見た実例をここにご紹介し、是非多くの博物館事業、教育活動のご参考にしていただきたいと希望します。

博物館教育は学校教育と異り、同年令層の人々を対象として企画的に前もって作られた教育内容を与えるのは異り、その時々日本の社会の動きや必要に応じて、博物館の特性を生かした催物を企画したり、教育プログラムを組む事はよう易な事である。又特別展示や移動展示などにもこの様な時事性、ニュース性を取り入れると常設展示のマンネリ化を防ぐだけでなく、博物館が、真にその時々日本の社会の要請に応じた高度の社会教育機関としての役割を十二分に果たす事が出来るのではなからうか？具体的に時事性、ニュース性を取り入れた催事や教育とはどのようなものであるか？実際に例示して説明して見ますと、これは昭和43年頃の事です、アメリカで「活性D・N・Aの人工合成へ成功。／」と云うニュースが、日本でも新聞やT.V.で大きく発表された。この事「活性D・N・Aの人工合成」については世界中の生化学者の注目の的であり、戦後、栄養学や遺伝学の進歩の目ざましい日本でも多くの研究者、学生の関心の的でもあった。お粗末ながら私も少しばかりこの面への知識を持合せていたので、すかさず目を留めて、この事実がどう云う事か、この事に関心を持っている多くの人にわかり易く理解される様な講演会を企画した。先ず講師にこの道の権威者であった慶応大学医学部の渡辺格先生にお願いした。そしてこの講演の案内を関東地区の各大学、研究所（大体1時間位で来館可能な範囲）の生化学研究室宛に出し「友人、知人、おさそい合せの上にご来場下さい。／」と付した。——もっとも博物館の玄関にも大字の墨字で看板を出したが、これは大して有効とは思われなかったが——そして何人位の入場者がいるか同僚とカケをしていた。皆はいつもの講演会が35～60人位だから50～100人

も来れば上々だ！と断言していた。私はイヤ100人～200人は来る！と頑張って講演会場を300人入りの講堂に用意した。最初は会場を小さな部屋に変えた方が良いのではないかと云われていたが、開演まぎわになっても引切り無しの入場者が有り遂に320人に達し講堂も超満員となったばかりでなく聴講者の殆んどが学生、研究者という青壮年層ばかりで皆熱心にノートをとっていた。更に最後に質問が多くそれも極めて専門的・真けんな態度の質問ばかりで、新たな学説が当日生れるのではないかと云われる程の盛況振りであった。かくて国立科学博物館開館以来これ程の盛況を見た例は未だかつて無かった。終了後、関係者の皆から「一体何処に理由が有るのだ？」と問われたが、答えはたゞ一つ「テーマに時事性・ニュース性が有り、タイミングをうまくつかんだからである。」この一言に尽きる。そしてこの事は正に博物館の高度の社会教育機関としての役割を十二分に果たしたと云う事が出来るであろう。

この事は単に一例に過ぎないが、毎日の新聞やT.V.ニュースの中には博物館の教育企画にふさわしいテーマがあふれている。例えば、

1. 地震と津波
2. 北方領土問題と北洋（北洋の漁業、世界三大漁場と海流 etc）
3. 海洋開発と日本の領土の問題、近海一海の牧場—
4. 日本列島改造論では日本列島の地理的条件と産業の開発
5. 遺伝子工学と遺伝子の組換え
6. etc

この様に生物学、科学技術、医学、物理、化学等の各分野においても最も注目されるテーマが、日々刻々に報道されている。こう云った日常のニュースの中にテーマを見つけてタイミングよく取りあげ、人々の関心度の最も高い時に博物館教育事業として企画し科学的により興味深く、広く社会的な問題として行く事は社会教育機関として重要な事であり、博物館に若い青年層や社会の第一線で働く人々、婦人層を誘致し新しい息吹を吹込み活動を活発ならしめる大きな引金となる。

又、今後21cにかけての日本は、「天然資源皆無の狭い島国にあふれる程の人口をかゝえて、より困難な世界状況の中に他の国々と磨擦なく生きて行くには、如何なる生き方をなすべきか？」と云う大きなテーマを出されている。これは日本人の1人1人が考え解決して行かねばならない重大なテーマである。

これに対し、日本人の勤勉さ、技術の精功さこれを基

により優れた新しい技術を開発し諸外国から資源を輸入して、優れた技術で加工生産し、再輸出することによってドルを稼ぐ以外に方法が無いと云われている。

このためには新しい優れた技術の開発、創造が大きく叫ばれていて、政治、経済、外交の大きな力が大巾に動き出している昨今である。したがって当然教育も新しい創造性を育てるための教育が重視され、博物館教育は如何にあるべきかと問われて来ている。

この社会の動きに対しいち早く目覚めた教育ママ、教育パパ達が、自分の子供を創造性豊かな人間に成長させるには——と近年、婦人層の間で、コスモ、ニュートンと云った美の科学雑誌の売行きが爆発的上昇現象だそうである。社会教育機関である科学博物館は当然この要請に答えてこのエネルギーを取り上げ、自然科学に対する興味や学ぼうとする情熱を正しくのばし、自然科学の知識を身につかせ応用力のある創造性の芽を育くむ使命と義務があるのではなからうか。

ニュートン・コスモ等の科学雑誌には生命科学の問題生命や自然の驚異・宇宙・天体・核エネルギー・海洋に関する問題・科学技術・etcと多くの分野にわたって記されており、実に博物館の教育としてふさわしいテーマが多く、親子共々学び創造性を育くむ良き社会教育事業となす事が出来る。

これは自然科学の分野のみを例として取り上げて述べたが、美術館、歴史博物館、民族博物館等の分野においても同じ事が云えるのではなからうか?特に現代のように日本人の目が広く海外に向けられている時は今迄にないと言われている。今後は日本人の1人1人が国際人、地球市民として活動する事を要求されているため各国の文化や歴史等に対し関心の高まりも大きい。こう云った時勢を利用して海外各国からの国賓の来日、又日本から皇室や首相、閣僚の海外訪問の際等には日本への関心の高揚、又海外各国への関心の高まりを活用して、日本の紹介をかねた訪問国での各種の展覧会、展示会、講演会、催物(日舞、歌舞伎、能、音楽、生け花、茶道等の)、産業展を行ったり、又日本を訪問された人々の各国の催物、展覧会を行えば常時の数倍もの理解と友好に役立つ事が予想される。又訪問された方々への歓迎の熱も一段と高まり、広く好結果が得られるであろう。

例えば、エリザベス女王の訪日を記念して「イギリス王室秘宝絵画展」を催し日本画をも同時に展示された様に、人々のイギリスへの関心を深めたばかりでなく日本画(日本文化)とイギリスの絵(イギリス人の自然観やイギリス文化)との比較交流を行う事が出来たのではな

からうか?この様な機会を捕えた展覧会、物産展、映画会、講演会等は平常時の数倍の効果、理解をもたらすばかりでなく、関係各国との理解と友好を深め多難な政治、外交の問題が多少有っても大衆の熱意や友好によって事がスムーズに進んだり暖かい解決に結びつく事も多く、単に美術、科学の展覧会の領域を越えた大きな意義をもたらすものである。

フランス等では、大統領の訪日に際して新種のバラを二種お土産にたづさえて来て、可れんな方のバラには「プリンセス・サヤ」と名付け、もう一方には「マダム・サチ」と名付けて、にこやかにプレゼントしたその後で、何と武器輸出の話を堂々として行ったそうである。これ程までにならなくとも、日本も、も少しこういった面で利口になっても良いのではなからうか?

今後21cにかけて、日本の国際社会への役割活動を考える時、益々こう云った機会を捕えての各種博物館の活動・役割は重視されて来ると考えられる。このために英・仏・独・伊語等を話す事が出来、国際感覚をも理解し得る国際学芸員の養成も必要ではなからうか。

教育に時事性・ニュース性を取り入れたカリキュラムを作成することは、単に社会教育面ばかりでなく学校教育においても「カリキュラムは教育の心臓部であるから、21cに生きる目的に合せて変化されなければならない。」(Styles of Curriculum Development, OECD/CERI 1972)(School-based Curriculum Development) OECD/CERI 1979)等で強く主張され、時代に即した特殊カリキュラムを組成しなければ、生き残れない事が主張されている。

学校教育でさえもこのように時代に即したカリキュラムの組成を行う時勢であるから、ましておや社会教育の代表機関である博物館における教育プログラムに時事性・ニュース性を取り入れる事は、今後21cにかけての博物館の運命を左右する事柄と云っても過言ではなからう。

近年、博物館に関する多くの書物も出版されている。「そして日本社会の驚異的な進展と多様化は、当然ながら博物館に対しても現状から脱皮して、社会の要請に応えることを求めている。観る博物館から考える博物館へ、語る博物館へ、参加する博物館へ、そして創る博物館へとそのアプローチは未踏の道を歩き始めようとしている。博物館の近代化とは何か。この命題に応えるものそれが我々が追求している博物館学である。」(博物館学講座・全10巻の巻頭編集者のことばより抜粋)と記されているように今後日本に於けるこの分野の開発はめざましい事が期待されます。

しかし現在までの博物館学, 社会教育学のテキスト・教科書を見ても, 横の広がり, 各地方の産業, 自然, 文化歴史 etc の特色を生かした指導は具体的且つくわしく説明がなされている。しかし時の流れを適確に捕えタイミング良く大衆の心理をつかみ, 引上げて教育する事や講演会催物に時事性・ニュース性を取り入れて, 人々の関心が高まっている時に, フレッシュな博物館教育をなすべき事については未だあまり記されていないように見受けられる。十数年前の事でありながら, 私の試みた催しがありにも目ざましい成果を見たばかりでなく, この時の流れに沿ったタイミング良い時事性, ニュース性を取り入れた企画, この分野を開発する事によって現在までの博物館活動を5~6倍までも高めめる事が出来, 巾広く, しかも社会の第一線に働く人にも, 又若い青年層にも魅力あふれる博物館となす事が出来, 博物館活動の革命的成長発展にもつながるのではないかと思いますので, 粗末な表現であるにもかかわらず, 私の体験談を発表させていたゞきました。

終。

国立科学博物館行事記録(昭和43年3~4月)

(他の催事参加者との比較)

1. 講演会・講習会

- 3月16日(土) 天文学普及講演会「天文ニュース解説」本館 村山定男, 「小惑星の話—イカルスをめぐって—」五島プラネタリウム 水野良平 45名
- 3月16日(土) 春山の気象講習会 日本気象協会共催 「春の天気図の見方」日本気象協会 近藤喜吉 40名
- 3月17日(日) 春山の気象講習会 日本気象協会共催 「山の雲と天気変化」気象庁 長谷川四郎 「春山の気象と遭難」気象庁 北原由昭 38名
- 3月24日(日) 植物愛好者のつどい 「タイ国採集旅行談」本館 小山博滋, 「緑の自然をまもる」林業試験場 今関六也, 「テンナンショウ属の分類」神奈川県立博物館 大場達之, 座談会(出品者および有志) 128名
- 3月30日(土) 科学写真の講習会 科学写真研究会共催 「接写の基礎知識」東京光学 飯田久夫 42名
- 3月31日(日) 科学写真の講習会 科学写真研究会共催 「生態のマクロ写真—応用篇—」東京シネマ 佐々木昆, 東海区水産研 竹村嘉夫, 千歳高

校 種村ひろし 30名

4月20日(土) 生物科学講演会 「活性DNAの人工合成」慶応大学 渡辺格 320名

4月20日(土) 天文普及講演会 「天文ニュース解説」本館 村山定男, 「望遠鏡の常識」日本天文研究会 小森正幸 73名

2. 講座

生態学専門講座(附属自然教育園にて2月17日より開講)

3月2~3日(土~日) 推定および検定のしかたと理論 統計数理研 崎野滋樹 17名

生態学入門講座(附属自然教育園)

3月12日(火) 「生態学の基礎理論」千葉大 沼田真 90名

3月13日(水) 「光条件と群落光合成」東京大学 佐伯敏郎 71名

3月14日(木) 「植物群落と水分条件」東京農工大 牛島忠広 61名

3月15日(金) 「植物群落と栄養塩類」都立大 翠川文治郎 67名

3月16日(土) 「植物の競争現象」東京大学 広井敏男 64名

3月17日(日) 「森林の物質生産」林業試験場 蜂屋欣二 59名

3月18日(月) 「水界の物質水産」東京水産大 有賀祐勝 59名

3月20日(水) 「植物群落の分類」横浜国大 宮脇 昭 60名

3月21日(木) 「動物の行動」東京農工大 小原嘉明 52名

3月22日(金) 「動物の個体群生態」中村方子 46名

3月23日(土) 「無脊椎動物の社会」白梅学園女子短大 近藤正樹 46名

3月24日(日) 「高等動物の社会」山階鳥研 浦本昌紀 42名

3月25日(月) 「高等動物の地理分布」山階鳥研 黒田長久 36名

3月26日(火) 「動物の群集生態」都立大 北沢右三 41名

3月27日(水) 「微生物の生態」都立大 手塚泰彦 46名

3月28日(木) 「生態系」東京教育大 三島次郎 48名

3月29日(金) 「植物群落の遷移」 早稲田大

大島康行 43名

3. 採集会, 見学会, 観察会

3月30日(土) 「化石の採集と見学会」 千葉県  
市原市瀬又 瀬又付近の貝化石の採集と地質の見学  
本館 尾崎 博, 名仙卓 97名

4月20~21日(土~日) 「地質見学会」 千葉  
県安房郡鴨川付近 超塩基性岩, 粗粒玄武岩, 嶺岡層  
群の地質見学 本館 橋本光男, 齊藤 二 25名

4月28日(日) 「新浜の野鳥を観察する会」 千  
葉縣市川市新浜 日本野鳥の会 西崎敏男, 本館 藤  
岡 薫 37名

4月28日(日) 「いその生物を採集する会」 神  
奈川県葉山町芝崎海岸 桜井 一, 地質調査所 大山  
桂, 東邦大学 吉崎誠, 本館 波部忠重, 町田昌昭,  
今島 実 125名

4. 映画会

3月10回 2,526名 4月8回 2,382名

5. 夜の天体観望公開

3月1回 42名 4月3回 190名 本館 村山  
定男, 小山ひさ子

6. 附層自然教育園の日曜野外案内

3月3日(日) 御料池だった自然教育園 北村公  
子 7名

3月10日(日) カエルの産卵 千羽 示 36名

3月17日(日) 早春の野草 奥田重俊 12名

3月24日(日) さえずりとききなし 千羽 示  
7名

3月31日(日) 早春の木々 奥田重俊 12名

4月7日(日) ヤマザクラ 手塚映男 24名

4月12日(日) 春の野鳥 千羽 示 12名

4月21日(日) アゲハチョウ 桜井信夫 16名

4月28日(日) 春の野草 奥田重俊 5名